こまざわ経済通信

発行
駒澤大学経済学部
同窓会
〒154-8525
東京都世田谷区駒沢
1−23−1

卒業おめでとう！

経済学部同窓会会長
大場やすのぶ会長

ご卒業おめでとうございます。

平成の最後となる年に駒澤大学を卒業される皆さんと、新しい時代に入っていく日本を築くためにともに歩めますこと、我々卒業生にとって何よりの喜びです。

「物事に不可能はない、必ず道がある」---昨年ノーベル医学生理学賞を受賞された本庶佑さんの言葉です。恐れることなく困難に挑み、自らが信じることに向かって努力し続けていくことの大切さを語るこの言葉を、新しい門出のお祝いとして同窓会から皆さんにお贈りします。

社会に出たばかりの時は、誰もが未熟な新人です。しかしながら、必ずできる、という確信をもって諦めずにチャレンジを継続していけば、皆さんも自然と人物として評価されていきます。そして、より大切なことは、将来成し遂げて大成してからも、その姿勢を決して忘れないことです。

卒業生が集う同窓会では、先輩から様々な人生訓を得、自らを涵養し、友人との交流も深め、後輩を育てていくことができます。

皆さんには同窓会に入って、未来に向けて一緒に夢を語りあいながら、社会に貢献していただきたいと心より願っています。

平成31年の人事について

平成31年3月に4名の先生が定年退職を迎えられます。また、新年度には2名の先生が着任します。経済学部はいま、変化の時を迎えています。

定年退職（平成31年3月）

石川　純治　教授（会計情報論）　曽我　信孝　教授（マーケティング）
百田　義治　教授（企業経営学）　光岡　博美　教授（社会政策）

新任（平成31年4月～）

中西　大輔　准教授（マクロマーケティング）
吉田健太郎　教授（アントレプレナーシップ論・事業創造論）

新・学部長（平成31年4月～）
岩波　文孝　教授（企業管理論）

新・大学院経済学研究科委員長（平成31年4月～）
溝手　芳計　教授（農業政策）

新・大学院商学研究科委員長（平成31年4月～）
中濟　光昭　教授（情報経済ネットワーク論）

経済学部創立70周年を迎えて

経済学部同窓会役員会

駒澤大学に経済学部の前身である商経学部が創立されたのは、まだ戦争の傷跡が残る1949年（昭和24年）であった。3年後には勤労学生を対象に第2部が設置され、昼夜2部制が取られるようになった。

商経学部創立時の専任教員はわずか7名であった。学生数も少なく昭和27年の第1回卒業生は15名であり、その後10年ほど卒業生が100名程度の時期が続いた。しかし昭和30年代なかばから日本が高度成長期に入ると大学進学者は激増し、それと歩調を合わせて経済学部の学生数も急角度で増加していった。昭和41年商経学部は経済学部に名称変更し、同時に経済学科、商学科、第2商経学科（6年後に第2部経済学科）の3学科制が確立した。国外ではベトナム戦争、国内では大学紛争が燃えあがる激動の時代であった。その後、平成19年に第2部が現代応用経済学科に移行し、現在に続く学部組織の骨格が完成した。世界的な金融危機リーマンショックが起こる前年のことである。

こうして本年は商経学部創立から70年の節目を迎える。その途はかならずしも平坦ではなかったが、現在（2019年）は専任教員50名（内女性教員8名）、学生数3,423名（女子学生率28％）の学部として揺るぎない地位を築いている。70年前を想えばまさに隔世の感がある。世界や日本経済の変化に対応し、時代の要請に応える人材育成をめざし今も進化を続けている。また各方面での卒業生の活躍によって、経済学部は社会的にも高い評価を得るようになった。

経済学部同窓会は平成5年会員の親睦と経済学部の教育支援を目的に設立された。学生シンポジウムやソフトボール大会の後援、インターンシップ、同窓会長賞授与等の事業を実施している。経済学部が人間性豊かなプロフェッショナルを輩出し、社会に貢献する学部として輝き続けることを願い支援をしていきたい

昭和30年代の大学と矢吹敏雄先生を偲ぶ

伊藤　吉次
（昭和36年商経学部卒業）

私の大学生活は、昭和32年から36年の卒業までででした。当時の学生数は、仏教、文学、商経学部で1,800名の小規模の文系大学でした。36年全学部で卒業生は463名で現在の7学部17学科、在校生約15,000名に比べると想像もできないほどです。学生は仏教の教義並びに曹洞宗立宗の精神に則り、学校教育を行うこと「行学一如」という建学の理念に憧れて入学した人、転部、他大学からの編入者と様々でした。また学費が、私立大学で最低廉であることも魅力でした。

矢吹敏雄先生との出会いは昭和34年4月の国際金融論の講義でした。先生は実業界出身でいらしたので社会人へと育つ学生にとって大切な事柄や日本の未来の姿を指し示すような魅力ある講義でした。たとえば流通がスムーズになることで経済もスムーズになる。その為には高速道路を造ることが大切であること。また大学もコンピューター化しなければ発展なしという持論を語られました。先生が存命でしたら現在の電子化社会をいかに語られるかお聴きしたいところです。

昭和51年6月に「矢吹会」が創設され、以来30余年、先生の熱い教えに賛同する教え子が年代を越え集い語り合える楽しい会として続いております。平成元年の会では野球部の太田誠監督、中畑清氏、野村謙二郎氏も出席下さり、会を盛り上げてくださった事は晩年の先生も喜ばれ、とてもなごやかな会であったことは忘れられません。現在は文武両道の大学として広く認知されていることに、港区元麻布の賢(けん)崇寺(そうじ)に眠っておられる先生もお喜びのことでしょう。

商経学部のあゆみと学び舎での想い

谷敷　正光
（昭和43年卒、
駒澤大学名誉教授）

商経学部が開設されたのは、昭和24年のことである。新制駒澤大学は，戦後新制大学の発足と同時に仏教学部、文学部、商経学部の3学部によって発足している。商経学部の設置にあたって専任教員は笠森伝繁先生、森荘三郎先生の奔走により三輪清一郎先生、山名寿三先生、上山義昭先生、吉沢文男先生、永田正臣先生、笠森伝繁先生、森荘三郎先生の7人で発足し、初代の商経学部部長には森荘三郎先生が就任した。昭和27年商経学部は最初の卒業生を出したが15人であった。同年、渋谷に勤労学生のための商経学部第二部を開設し、部長には笠森伝繁先生が就任した。しかし、渋谷分校は繁華街にあって教育環境としてあまり好ましくなく、昭和37年本校に合流し渋谷分校は10年で使命を終えている。

昭和30年代後半以降、高度成長による進学率の上昇と駒澤大学の経営拡大策により、駒澤大学に入学する学生の数は急激に増加して、商経学部第一部の入学者は昭和34年の約230人から昭和41年には約1070人となった。学生の量的拡大に大学は500人教室専用の「カマボコ校舎」や900人収容の大教室を備えた（旧）三号館の建設で対応している。授業形態は、少人数による牧歌的な授業からマイク片手に授業を行うマスプロ授業へと変化し、授業環境は著しく低下していった。

わずかだった専任教員は、昭和37年には（写真1参照，前列左から）藤井新一先生、浅井清先生、笠森伝繁先生、森荘三郎先生、三輪清一郎先生、森凱雄先生、片岡義雄先生、（後列左から）遠藤孝先生、吉沢文男先生、永田正臣先生、長谷川忠一先生、上山義昭先生、長谷川誠一先生、寺中良二先生、古庄正先生によって担われていた。

私が入学したのはそんな過渡期の昭和39年で、校内は講堂を兼ねた体育館が5月に落成ばかりであった（写真2）。この体育館は東京オリンピックの際はバレーボールの練習場として使用され、まだ外国人をあまり見ない時代に校内には試合前の練習に訪れる外国人選手でいっぱいであった。東京オリンピックのための国道246号線の拡幅工事もほぼ終了し、学生が通学に利用した玉川電車の駒沢停留所周辺の混雑もかなり緩和した（写真3）。

入学後、私が最初に受けた講義は「カマボコ校舎」（写真2　二号館の隣がカマボコ校舎）の大教室で、寺中良二先生の簿記論であった。簿記論の1時間目の授業は「八桁精算表」の筆記試験で、普通高校を卒業したての私には「貸方」「借方」も分からぬまま、なすすべもなく1時間過ごしたのを今でも覚えている。当時、学生の多くは普通高校の卒業生のため、簿記の学力を知るための試験であったと思うが、「大学は勉強するところだぞ」という戒めであったようにも思う。カマボコ校舎は窓が極端に少なく、空調施設とてない大教室で、暑い日の教室は蒸し風呂状態で、先生、学生ともに大汗をかき悪戦苦闘した。なぜカマボコ校舎なのか疑問に思っていたが、その後、大学院に進んだ折に笠森先生、吉澤先生に伺ったところ「あの校舎は羽田飛行場にあった米軍の兵舎」であり、「プレハブ校舎として昭和36年に払い下げを受けた」が、「払下げにあたっては米軍や国との交渉にとても難儀した」とのことであった。

写真1　昭和37年当時の商経学部時代の先生

写真2　昭和39年落成した体育館とキャンパス

写真3　通学に利用した玉川電車

写真4　大正のロマンを感じさせる大講堂

写真5　左が1号館、写真右が2号館

その後も学生は増加し続け、ついに教室に入れず立ったまま講義を受ける状況となり、昭和38年には（旧）1号館校舎（昭和14年建設）と（旧）2号館校舎（昭和6年建設）の屋上に大教室を増築し、昭和42年には8号館、大学会館、（旧）軽食堂パオなどが、昭和46年には9号館を次々に建設し、校内に槌音の響かない年はなかった。その後、大正14年に建てられた「大正のロマン」を感じさせる（旧）大講堂（写真4）や（旧）1号館と（旧）2号館との間に中庭を配置した重厚なたたずまいの回廊校舎（写真5）は耐用年数により昭和57年に立て替えられ、現在は本館になっている。

私にとって駒澤大学は人格形成の重要な時期で、感銘をうけた偉大な先生がたくさんおられた。

その一人が笠森伝繁先生であった。先生は農業政策を講義されたが、講義は東大式の口述授業であった。学識経験者（公益委員、審議会委員）として石川県の農政に長く関ったこともあり、講義は農業政策の事例を一つひとつ挙げて丁寧に説明された。熱情のあまり講義時間が過ぎても止まらず3時間から4時間に及ぶこともあった。先生は大学に滞在中、仏教経済研究所付設の和室に宿泊されたが、講義の後には受講学生を和室に招いてコーヒーをご馳走してくれることもあった。コーヒータイムに先生が話された地租改正による土地開放の話や農村の様子、産業勃興期にかかわった銀行業や鉄道業・倉庫業・製糸業の話は日本経済史の専門書では得らない貴重な話であった。一高で共に学んだ学友の和辻哲郎氏（哲学者、京都大学教授）は「笠森は物柔らかい印象を与える人であった」（記念録）と評されたが、その通りの先生で、学生にはいつも優しく接しておられた。学生の質問には丁寧に説明し、文献なども細かに紹介し、文献が図書館になく学生に高額なものは自腹で購入して貸与し、読み終えて返却に行っても「また必要になるから」と受け取らなかった。本当に慈愛に満ちた先生であった。

また、1年次の経済学の講義は吉沢文男先生が担当された。先生の経済学の講義に触発されて私は一学年先輩の春山先輩、村西先輩が立ち上げた経済学研究会(顧問　吉沢文男先生)に所属してマルクス経済の基礎を学んだ。永田正臣先生は経済史と近代経済学を担当された。どちらの講義にも深く感銘を受けたが、特に経済史の講義は興味深く、後に大学院進学のきっかけとなった。近代経済学のおもしろさにもひかれ、三谷氏、佐藤氏らと近代経済学研究会（顧問　長谷川誠一先生）を立ち上げ、ケインズの「一般理論」を学んだ。両研究会は現在も継続して多くの学生が学んでいることは誠に嬉しい限りである。

先生方の中にはおもしろい先生もおられた。授業前に「お茶」と称する飲み物を水筒から取り出してゴクリと飲み、「お茶」が体に行き渡ると弁舌さわやかに講義にも熱を帯び、内容に切れ味を増していった先生を思い出す。

授業中にある先生から伺った学生の忘れられない話を最後に一つ。先生は、定期試験の最中に答案の裏に一万円札を貼り「これで単位をお願いします」と願った学生のとてつもない行動を上手に紹介して、「お札は答案の回収時に没収され、残念ながら私のもとには届かなかった」という冗談に思わず笑ってしまったことがある。その後、私は経済学部の教師として43年間奉職したが、在職中「お茶」を飲んで講義をした先生や試験答案にワイロを貼る学生の話など聞いたことがなく、今から考えると商経学部の時代はまだ牧歌的なおおらかさが残っていたような気がする。

(注) 写真1　「駒澤大学経済学論集」第11巻第3・4号口絵。　写真2　『駒澤大学百二十年』68頁。
写真3　宮脇俊三『世田谷たまでん時代』大正出版50頁。　写真4　昭和40年撮影。
写真5　昭和39年撮影。

里中恆志名誉教授を偲んで

森岡　仁（駒澤大学名誉教授）

私が里中先生と駒澤大学の門を潜ったのは 1966 年春のことである。2 年前の東京オリンピックの余韻がまだ残り、4 年後の大阪万国博覧会に向けて国民の機運が高まりを見せている時期であった。いま再びオリンピックと万国博のわが国開催が決まり思い出されるのは、大志を抱いて新たな研究への道を歩み始めた半世紀前のことである。先生は講師、私は助手からの出発であった。

その里中先生が平成30年7月3日に逝去された。享年80歳。退職直後は何度かお会いすることはあったが、ここ数年その機会もなく賀状の往来だけであった。やや体調を崩されていることは風の便りに聞いていたが、この度の訃報には驚愕している。

私たちが就職した頃は、受験生確保の手段として地方入試に頼る時代であったが、戦後のベビーブーマーが大挙して大学受験に参入し、高度経済成長に後押しされて大学進学率が急上昇するに及んで、やがて地方入試は姿を消し入学生も増えていった。里中先生は学部の受講生の増加に加え、税理士を目指す大学院生の指導にも熱心に取り組まれ、毎年数名の院生と共に合宿をして修士論文を作成するという気の入れようであった。

何事にも熱心で真摯な先生の性格は学部長時代にも見られた。1995 年に学部長に就任されるや、その翌年にスタートする新カリキュラムの編成作業に心血を注がれ、遂には顔面に異常を来すほどの多忙を極められた。また大学当局の姿勢に対し、学部運営や委員会活動などで発揮された先生の正義感に富んだ行動は、枚挙に暇がないほどである。いま里中先生の生前を語るとき、誠実で人間味溢れる人柄が追想されるが、葬儀の席で配布された＜追悼のしおり＞の中で「ときには父親のように包み込んでくれる温かい人でした」と述懐しておられる奥様の言葉には全く同感である。

合掌

ゼミ紹介

矢野ゼミ

矢野　浩一　（教授、経済統計a・b担当、2010年就任）

矢野ゼミではゼミ生の皆さんと一緒に実験経済学を行っています。実験経済学というのは、教場内でルールに従って「実験」をすることで経済学の理論等を実際に確認するという分野です。実験というと「理科系の話じゃないのか」と思われる方も多いかもしれませんが、近年では経済学でも「実験」を行うことがトレンドの一つになっています。具体的には、ゼミで『実験ミクロ経済学』（東洋経済新報社）といったテキストを基に、ゼミ生の皆さんが実験テーマについて考え、いろいろ工夫して「実験」を行ってくれています。実際にゼミ生の皆さんと「実験」してみると、経済学の教科書通りになったり、意外な結果になってしまったりと様々で、日々ゼミ生の皆さんと一緒に学び、考えています。

ゼミ生の卒業後の進路は銀行・生命保険会社・証券会社といった金融系から、各種メーカーや不動産業など様々です。3年生に入るとゼミでインターン等の説明や就活のための業界研究・企業研究・職種研究などを指導しています。4年生になってからは随時相談を受け付け、ゼミ生の皆さんが納得できる就活ができるように気を配っています。

また、私は経済統計という授業も担当しています。以前であれば「統計・データってなに？」と感じる学生が多かったかもしれませんが、近年は人工知能（AI）やビッグデータ（スマホ等から収集した膨大なデータ）がビジネスの最前線で話題になり、毎年多くの駒大生の皆さんが熱心に受講してくれています。

私が駒澤大学に赴任したのは２０１０年で、それから約１０年が経過しました。毎年素晴らしい学生の皆さん・ゼミ生の皆さんに囲まれ、彼らの目覚ましい成長ぶりを見守ることができ、また彼らから学ぶことで私自身も日々成長できることを大変にうれしく思っております。

研究室訪問シリーズ

田中綾一（2017年4月就任）ヨーロッパ経済・国際金融担当

駒澤大学には2017年4月に着任しました。学部では「ヨーロッパ経済論」の講義を担当しています。専門は国際通貨・金融論で、ポンドやドルといった基軸通貨の歴史を研究の主軸にしつつ、そこから派生して、ヨーロッパの経済や共通通貨ユーロなどを研究対象としております。

ヨーロッパとはどのようなところなのでしょうか。国際連合の地域区分では、ヨーロッパには実に50近くの国・地域が含まれます。世界の国・地域はおよそ250あるのですが、実にその5分の1がヨーロッパに存在していることになります。一方で、ヨーロッパ大陸の面積は世界の6％程度しかありません。このように、狭い地域に多くの国がひしめいているのがヨーロッパの第一の特徴です。

もう一つの特徴をみてみましょう。ヨーロッパにはおよそ5億人が暮らしています。5億人と聞くと多そうに感じますが、50か国で5億人です。日本は一国で1.2億人の人口を抱えています。ましてや、13億の人口を抱える中国などとは比較になりません。ヨーロッパで最大の人口を持つ国はドイツですが、それでも約8300万人と、日本の3分の2程度に留まります。つまり、アジアなどと比べると、ヨーロッパの一国当たりの人口規模は極めて小さいのです。

人口の規模は、その国のマーケットの大きさを規定します。狭い地域に多くの国がひしめいている結果、マーケットが国境によって細かく分断されてきたというのがヨーロッパの特徴です。これは、文化や社会の多様性を維持する基盤となる一方で、経済成長を阻害する要因ともみなされてきました。それゆえ、統合によってモノやサービス、ヒト、カネが移動する障壁を取り払い、「単一市場」を構築して構成国の経済を成長させることが指向されてきたのです。

統合の担い手となったのがEU（欧州連合）です。EUは、前身となった組織から数えれば60年以上の歴史を持ち、国際的にも存在感のある地域統合体となりました。長い歴史の中で様々な試練にさらされてきたわけですが、いま現在も、イギリスの離脱や移民・難民の流入、米国との貿易紛争など多くの問題を抱えています。講義やゼミでは、歴史をひもとき過去に学びながら、ヨーロッパがどのように現実に対処しようとしているかを伝えていきたいと思っています。

経済学部ゼミナール連合会 第4回学生シンポジウムの開催報告

第4回学生シンポジウムが2018年11月11日(日)に駒沢キャンパスで開催されました。新校舎の種月館(3号館)を会場に、気持ちも新たに行われました。経済学部ゼミナール連合会が運営上の中心的な役割をになう学生シンポジウムには、経済学部を始め経営学部、法学部など17ゼミから38チームが参加し、総勢200名の学生たちが日ごろの研究成果を発表しました。多文化共生、情報リテラシー、タックスヘイブン(租税回避地)、仮想通貨、日韓関係など社会的にも注目度が高いテーマを選んだチームが多く、分科会数は7つにおよんで議論を深めることができました。

参加者からは、発表準備の数か月間は悪戦苦闘の連続だったが、終わってみれば大変よい学習になったという感想が寄せられました。ゼミがちがえば社会を見る視点も異なるため、他のゼミとの研究交流は、普段以上に発表に創意工夫が求められますし、何よりも自分たちの狭くなりがちな視野を広げてくれる大切な機会にもなっていると感じました。学生シンポジウムが、その後のゼミの取り組みに活力を与え、一人ひとりの学生生活を少しでも充実したものに貢献できたとすればこれ以上に嬉しいことはありません。

私自身も学生シンポジウムの運営代表として、一つひとつの仕事に対する責任感、数多くの学生を動かすためのリーダーシップ、学生や教職員などさまざまな方々と関わるためのコミュニケーション能力などの重要性を再認識できました。私ひとりでは何もできませんでしたが、約7カ月という開催までの準備期間をともに助けあい活動してくれたすべての方々に感謝したいと思います。今回のシンポジウムをつくり上げる過程で得られた仲間との信頼関係は、私にとっての財産です。

最後となりましたが、同窓会の皆さまにはご多忙の中、学生シンポジウムに足を運んでいただき誠にありがとうございました。学生を代表して、心よりお礼を申し上げます。次回シンポジウムでもお会いできることを楽しみにしています。学生の主体性、研究に対する熱意、社会と向き合う力が培われる学生シンポジウムは、「学び、繋がる」という駒澤大学のビジョンとも共鳴し、今後ますます進化させていく所存です。これからも変わらぬご支援、ご協力を何とぞよろしくお願い致します。

第4回学生シンポジウム代表　経済学科3年　後藤順基

副代表　現代応用経済学科3年　高瀬巧大

現代応用経済学科ラボラトリ研究員公募

駒澤大学経済学部現代応用経済学科ラボラトリ（通称：地域協働研究拠点）では、研究員を公募しています。詳細は、ラボホームページ（https://www.komadaicommunitylab.com/）をご覧ください。

経済学部のホームページがリニューアルされました！

2018 年 4 月に経済学部のホームページ（https://www.komazawa-u.ac.jp/gakubu/keizai/）がリニューアルされました。Twitter（＠KomazawaKeizai）でも情報発信を行っています。

駒澤大学大学院 商学研究科で学びませんか？

商学研究科では、2018 年 4 月から土日や夜間開講の講義が増えました。流通・マーケティング、金融・貿易、経営、会計、租税法などについて学ぶことができ、指導教員以外の複数教員による「複数指導制」を選択できるので、充実した研究指導を受けることができます。大学院進学相談会も随時開催しております。詳細は大学ホームページをご覧ください。

同窓会事務局からのお知らせ

＊同窓会組織の強化にご協力ください

同級生、ゼミやサークルの仲間、地域のお知り合いで「経済学部同窓会」に加入していない方がおられましたらご紹介ください。未加入の方に事務局から入会案内をお送りします。

＊「こまざわ経済通信」の原稿募集

同窓会報の充実のため原稿を募集しています。
積極的なご投稿をお願いいたします。

- 論　題：自由
- 字　数：800 字以内
- 送付先：駒澤大学経済学部同窓会事務局 (下記)
  原稿の採否は事務局にご一任ください。

＊役員を募集しています

ボランティアで同窓会の仕事をしていただける方を募集しています。
軽い仕事なのでご負担になることはありません。仲間と楽しみながら、同窓会と経済学部の発展ために貢献できます。
有志の方は事務局までご連絡ください。

＊facebook の公開グループを立ち上げました

経済学部同窓会の公開グループ（https://www.facebook.com/groups/komakei.obog/）を立ち上げました。
同窓生の情報発信や情報交換の場としてご活用ください。

経済学部同窓会事務局（経済事務室内）
〒154－8525　東京都世田谷区駒沢１－２３－１
電話：０３－３４１８－９３４３